

## CONTENTS

[Cover](#)

[Other Books by This Author](#)

[Title Page](#)

[Copyright](#)

[Dedication](#)

[INTRODUCTION](#)

[1. A QUESTION IS ASKED](#)

[2. A FRIEND IS ENCOUNTERED](#)

[3. A VICTIM IS NAMED](#)

[4. A WOMAN IS VIEWED](#)

[5. A CRIME IS DISCUSSED](#)

[6. A THEORY IS REFUTED](#)

[7. A DOCTOR IS PRODDDED](#)

[8. A SPACER IS DEFIED](#)

[9. A ROBOT IS STYMIED](#)

[10. A CULTURE IS TRACED](#)

[11. A FARM IS INSPECTED](#)

[12. A TARGET IS MISSED](#)

[13. A ROBOTICIST IS CONFRONTED](#)

[14. A MOTIVE IS REVEALED](#)

[15. A PORTRAIT IS COLORED](#)

[16. A SOLUTION IS OFFERED](#)

[17. A MEETING IS HELD](#)

[18. A QUESTION IS ANSWERED](#)

[About the Author](#)

### ---1. A Question is Asked

(問いはなされた)

ニューヨークのElijah Baley (Lije)はワシントンに召喚され、空路で向かう。そして司法省の事務次官のAlbert Minnimに会う。

Lijeはそこで初めて、召喚の目的についてMinnimから説明を受ける。

それはSpace World の一つの惑星であるSolariaで起きた殺人事件の捜査であった。法務省からの依頼だが詳しい内容については不明。

Lijeは自分は43歳だし、地球を離れたことは無く、他に、適任がいるのではと、何とか断ろうとする。しかし、ニューヨーク市の刑事であるあなたをご指名。派遣期間中はC6からC7の待遇に家族も含めレベルアップする。そして、成功裏に業務遂行の暁には、それがパーマネントとなるという好条件。断ることは出来ない。

宇宙船は2日後に出発。家族はしかるべく処遇されるが、連絡は不可。

無茶苦茶な話ではあるが、Lijeはしぶしぶ引き受ける。

そして2日後、ニューヨーク市の殺人事件でパートナーを組んだロボットのDaneelの案内でロケットに乗り込み、到着まであてがわれたキャビンで待機。ロケットは飛行機とは大違いで、一つの小さな都市のようであった。途中、何度か時空を超えるジャンプを繰り返し、いよいよ減速し始める。

Lijeはパニックになりそうであったが必死で耐える。

## ---2. A Friend is Encountered

(友人と出会う)

そして到着。キャビンのドアが開いてDaneelが入ってくる。

ニューヨークで捜査中に会ったDr. Fastolfeが、我々二人がSolariaの今回の殺人事件の捜査に最適であると、Solaria当局に推薦したとのDaneelの話。RX-2475というナンバー(名前ではない)のロボットが運転して、これから目的地に向かう。Dr. FastolfeはSpacer Worldで最強のAuroraの出身であり、Dr.の発言は重きを持つようだ。しかしDr.はDaneelがロボットとはSolaria当局に言っていない。それをLijeはRX-2475との会話で確認。Dr. Fastolfeや同僚も、自分たちの技術が優れていることを、Daneelが人間であるとSolaria当局に思わせることで示したい(威張りたい)という感情を持っていると思い至り、Spacerも同じ人間だと、安心するような気分になる。

そして宇宙船から大きいチューブを通して車に移る。車には車輪は無く、磁力で道路を走る。目的地までは1時間ほどかかるとのこと。

Lijeはそれまでの時間で出来るだけ情報を集めようとDaneelに聞く。

ここ惑星Solariaは移住が始まってから100年程で独立、それから200年ほどが経っている。人口は2万人、ロボットは2億体、一人当たり1万のロボット、それらは鉱山とエネルギー生産で主に使われている。

Spacer Worldで2番目に一人当たりのロボットの多い惑星はAurora、しかし、一人当たり50ロボット。

Lijeは車の天井を開けさせて外を直接体験しようとするが、Daneelはそれは貴方に害を与える恐れがあるから駄目だと言う。しかしLijeは何とか開けさせ外の世界を見て、空気を吸うが、オープンスペース、裸の太陽には慣れが無く、失神する。

### ---3. A Victim is named

#### (犠牲者の情報)

Lijeはしばらくして気が付く。そしてDaneelには外の世界をじかに感じたかったのだと説明。しかしDaneelはその必要はないと言う。

そして、捜査の間、二人が滞在する家に到着。そこには部屋がいくつもあり、Lijeは他に誰がいるのかと思うが、二人だけで、後はロボットとのこと。そして、この家はこの捜査のために新たに作られたもので、捜査が終われば取り壊される。

そして二人は談話室で待っていたSolariaのセキュリティー長官のGruerと面談。二人には事件については何も情報を与えてなかった。それは先入観無しに捜査を始めてもらいたいからだ。ここSolariaでは人はまばらに住んでいて犯罪は無く、ここ2世紀の間で初めて起きた暴力犯罪がこの殺人事件。しかも犠牲者は我々が最も失うことのできない人物、胎児学者のDelmarreです。この殺人を最もやれそうな人物はたった一人だが、その人は最もやれそうもない人物。しかし殺人はなされた。殺人現場にいた人間は妻のGladiaだけで、二人には子供がいたかどうかは分からない。

Gruerはそう説明してから、具体的な捜査は明日からにして、長旅でお疲れでしょうから、今日はお休みくださいと言って、椅子もろ共に消える。

Daneelの説明ではGruerは3次元の像で、実際には部屋に居なかった。

そして二人は食事をして、別々の部屋で休む。

LijeはJessieのことや、現在寝ている家、そして、置かれた状況をいろいろ考えて眠れない。特に、何故、Daneelが、あくまでロボットでなくSpacer Worldで最強のAuroraの人間としてふるまうのか。SolariaとAuroraの惑星間に何か紛争のようなものがあるのか、その他、いろいろの罫にはまったような気持ちで眠れない。

### ---4. A Woman is viewed

#### (一女性の捜査)

Lijeはいつしか眠り、そして翌朝目覚め、朝の身支度等を済ませる。

そしてDaneelから知っていることを聞き出す。

Solarialに人間が20,000人しかいないのは人口をコントロールしているから。そ

して、妻が同居の場合もあるので、惑星全体を20,000よりは少ない区画に分割し、それが各個人又は家族にあてがわれている。人が集まっているような都市はない。人との面会が必要な捜査はこの家の3Dビジョンで出来る。だから外に出る必要はない。

LijeはDaneellに、当面は人間として好きなようにさせておこうと考える。実は人間だというジョーカー札はいつでも切れ、捜査の主導権を握ることができる。

そして、まずは、犠牲者の妻のGladiaに面会しようと、家のロボットに案内させ、昨日Gruerと会った3Dビジョンの部屋に行く。

Lijeは未亡人のGladiaに会いたいのので、やり方を教えろと、そこで待機していた別のロボットに言うが、Daneelのアドバイスでそのロボットに任せる。(そのロボットの仕事は誰かとの面談を仲介することで、そのやり方を教えることは、そのロボットの仕事ではなく、混乱をきたす。)

壁が開き、その向こうに何かが見えるようになる。Lijeはそこに歩いて行く。それは別の3Dビジョンで、そこがGladiaの部屋。

彼女はシャワールームから出たところのようで、もやっとしたベールの上部がはっきりしてきて彼女の顔がわかるようになる。

魅力的な若い(と思われる)女性。そして、話を始める。

彼女はセキュリティー長官のGruerとは既に話をしている、Lijeが地球から捜査に来ていることは知っていた。

地球人に良いようにと、広い背景を消そうとして立ち上がる。しかし、裸で、Lijeはびっくり仰天。

## ---5. A Crime is Discussed

(犯罪についての面談)

Gladiaは戻ってくるが、肩からカバーをかけただけで、裸のまま。

しかしLijeはショックから何とか立ち直り、捜査のための質問を始める。

地球であれば、まず、出身、職業、年齢、夫婦仲、子供とかの個人情報聞きながら本題に徐々に入るわけだが、地球とSolariaでは、文化・文明が違い過ぎて、難しい。例えば年齢でも、Solariaは遺伝子操作等で平均寿命が約350歳。若くて魅力的なGladiaの年齢は33歳で、133歳でなくて一安心するが、とにかく本題に入る。しかし、会うということが3Dのバーチャルと現実で、ごっちゃにな

る。質問する方も、答える方も混乱。しかも、夫婦が会うという意味も違う。

Gladiaは殺人が行われた時に、現場にはいなかった。大きい家で、二人は別々の場所に暮らしていて、決まった日時に会う。それぞれが自分の仕事をしている。問題の日には、いつものように会って、少しお話をして別れた。そしてしばらくしてから夫の叫び声を聞いて、彼の居る所に行き、血だらけで頭を鈍器で潰された死体を発見。ロボットを呼んで、死体を片付けさせ、夫の職場に連絡させた。誰か他に居なかったのか、何か鈍器のようなものは無かったかは、記憶なし。

夫と私以外の誰かがこの家にいるということはありません。夫が誰かを呼んだとか、誰かが忍び込むとかは、ありませんとGladiaは主張。

しかし、セキュリティー長官のGruerは、殺された夫に会った人間がいるはずだと言っていたとLijeは指摘。しかし、Gladiaは、それは、私のことでしょうかと自分を指さす。

## ---6. A Theory is Refuted

(ある理論は論駁される)

突然、DaneelがLijeに言う。Solariaの状況を考えると、夫婦以外の人間が殺人現場に居なかったことは明らか、凶器が発見されなかったことについてはGladiaが説明できるかもしれない。

しかしLijeはGladiaに向かって、今日はここまでにしましょうと言う。そしてGladiaは通信を切ろうとするが、DaneelがGladiaに向かって、あなたが夫を殺したのですかと言う。Gladiaは「ノー」と怒って言い、通信を切断し、消える。

Daneelは続ける。もし彼女が罪を犯していて、無実を証明しようとしているならば、Spacerの私でなく、地球人の捜査担当刑事の貴方に気に入

られようとするはず。彼女は地球のことを調べていて、裸の姿を二度見せ、あなたはそれを魅力的と感じたはず。

Lijeはそのことは私の職業である刑事捜査には関係ないと反論。

Daneelは先入観なしに捜査を行うために、まだあなたには見せていなかったが、今朝、Gruerからレポートが来ている。

Lijeはそれをしっかり読む。

Gladiaが呼んだロボットが来た時、彼女は失神していて、そこには家のロボット

ではない別のロボットが居た。しかし、それは脳が壊れた状態。詳しく調べると「あなたは私を殺すつもりか」と繰り返し言うだけで、完全に壊れた状態。そして、被害者の頭をつぶした凶器は発見されていない。

Lijeは彼女はそのロボットのことは言っていなかったとか考えるが、Daneellに食事しよう、そして、また、Gruerと面会しようと言う。

そして、その後、Gruerとの面談が始まる。

Lijeは殺人容疑をかけるには三つの条件が要ると発言。それは、動機、手段、機会。Gladiaは機会はあるが、動機、手段は疑問。レポートによれば、ロボットは失神しているGladiaを診てもらうために医者呼んだ。死体はすぐに茶毘にふされ、凶器は見つかっていない。

Gruerによれば、現場にいた別のロボットは、殺人を防げなくて、つまりロボット原則1が出来なかった自責の念で、脳が壊れた、そしてそれは既に鉄くずにされている。そんなことで、何も証拠は残っていない。

そして、困った顔のLijeを見て、GruerはDaneellに、地球人は広い場所が苦手だから、窓が、全部きちっと閉まり、ベールがかかっているか見てきてくださいと、Daneelを行かせる。

そして、二人きりになった機会を捉えて、Lijeを呼んだ本当の理由を話す。それは、殺された胎児学者Delmarreは伝統を大切にしようという考えだった。しかし、ここには変化していかねばならないという考えのグループもいて、その証拠をDelmarreがつかみかけていた。そして、彼を黙らせる為に殺した。Delmarreは、地球も含めた全人類に危機が迫っているとも言っていた。それで私は、地球でのSpacerの殺人事件を担当したあなたの力を借りて、そのグループに対処しようと思い、最大勢力の惑星Aurolaに頼んで、あなたを呼んでもらった。

そして、Gruerは手にしていたグラスの水を少し飲む。しかし、それには毒が入っていて、Gruerは苦しんで、椅子から崩れ落ちる。

## ---7. A Doctor is Prodded

(医者促す)

その時、Daneelが戻ってきて即座に大声でGruerのロボットに主人が倒れていると叫ぶ。そして更に家の中と外に人間がいないかチェックするように命令。

Lijeは私は別室に行き、静かに考えたい、その間にGladiaに連絡して無事を確認、彼女の家とGruerの家の間の距離を調べるように言う。

Daneellはしばらくして別室のLijeのところに行き、Gladiaは無事、そして、距離は約1500KMと報告。

二人はGladiaが直接的・間接的にGruerに毒を盛る可能性について話し合う。そして、二人はGruerの家と3D交信する。

そこは、きれいに片付いていた。その部屋で待機しているロボットに確認すると、家の中も外もくまなく探したが、人間はいないとのこと。

Gruerのグラスに水を注いだロボットを呼びだし確認。それは単なる水。Gruerの好みで、グラスは冷やしてなく、台所に常温でいつも置いてある。

3D交信でGruerを診察している医者と交信。大部分の水は吐き出したのが幸いして生きているが、無事、回復するかは不明。Lijeはどういう毒が使われたか、タンクの水に毒は入っていないか調べるように医者に要請。

グラスもピッチャーも片付けられていて、それは調べられない。

二人はGladiaと再度、3D交信で会うが、それは、更に進歩した形態で、一緒に食事をしながら、お話しが出来る。

Gladiaの話では、彼女が夫の死体を見て失神した時に、上記と同一人物の医者が、3D交信でなく、実際に現場に来て、Gladiaと夫を診た。

LijeはGruerが毒を盛られた件についてどう思うかGladiaに聞くが、自分で盛る以外、誰かがすることは不可能との返事。

Lijeは、それは簡単なことで、私はどうやったのか知っていると言う。

## ---8. A Spacer is Defied

(Spacerに挑戦 / 虚勢を張る)

Gladiaの夫、そしてGruerと、今まで殺人が無かったSolariaで一か月の間に2件の殺人が行われた。これは関連していて同一人物の仕業と思われる。

Gladiaは私を疑っているのかと怒って言うが、Lijeは私が言っているのは殺人の方法のことで、貴女が殺人を行ったとは言っていないと言う。

しかし、Gladiaは、私をはめようとしている、と怒って、ロボットに通信を切らせ、消える。

DaneellはLijeに、毒を持ったのはGladiaと思っているのかと聞く。Lijeは、私の考えている方法を実行するにはGladiaは弱く、幼い。その方法はDaneellには分

からない。それより、誰がGruerの後継者となるのか調べ、明日朝一番に3Dで会えるように手配するようにDaneelに依頼。

そしてSolariaの現代社会を知るために日常を描いた大衆小説を数冊用意するように図書担当のロボットに命令、ベッドで何冊か読むが、あまりに状況・社会慣行が地球と違い過ぎて参考にならず、いつしか眠り、Jessieと太陽に照らされていて、誰もそれを怖がっていない地球の夢を見る。

そして朝となり、Daneelの手配で、Gruerの助手と3Dで会見。

彼はいかにもSpacer然としていて、傲慢。Gruerはまだ生きていたとのこと。そして今回の殺人事件はGladiaがやったことで、捜査は必要ない、地球に帰ってくださいと言う。Lijeは反論。あなたはGruerが追求していたことを恐れている、もし我々を追い返すようなことになれば、地球だけでなく、他のSpacer Worldをも敵に回すことになる。そして、最古、最強のAurolaから来ているDaneelを紹介し、彼からも捜査の続行を依頼させる。そしてLijeは、これからの捜査は私が主導権を取って行う、だから、私が必要と思う人間に会って聞き取り捜査を行う許可を欲しい。それは3Dでなく、必要ならば、直接、会うこともある。

Gruerの助手は考えさせてくださいと言うが、Lijeはあまり長くは困る、1時間以内に会いに行く予定がある、と言って、ロボットに通信を切らせる。

Lijeは、こういう展開は考えていなかったが、昨夜見た夢とSpacerの傲慢な態度とで、こうなった。しかし、捜査の主導権を握れそうなことには満足。

Daneelは、AurolaのボスがSolariaで起きつつあることに心配していることは知っているが、十分な情報は与えられていない。しかも、わずかなそれをLijeと共有することは禁じられている。しかし、Lijeが生きることが、絶対条件として命令されているので、Lijeがこの場所を離れて捜査のために誰かに直接会うことは危険であり、認められない。Lijeは、私がどうしてもやろうとしたらどうする、とDaneelに問う。Daneelは多少あなたを傷つけることになっても死なせるわけにはいかない、と力づくで止める、と答える。

## ---9. A robot is stymied

(ロボットが動けなくなる)

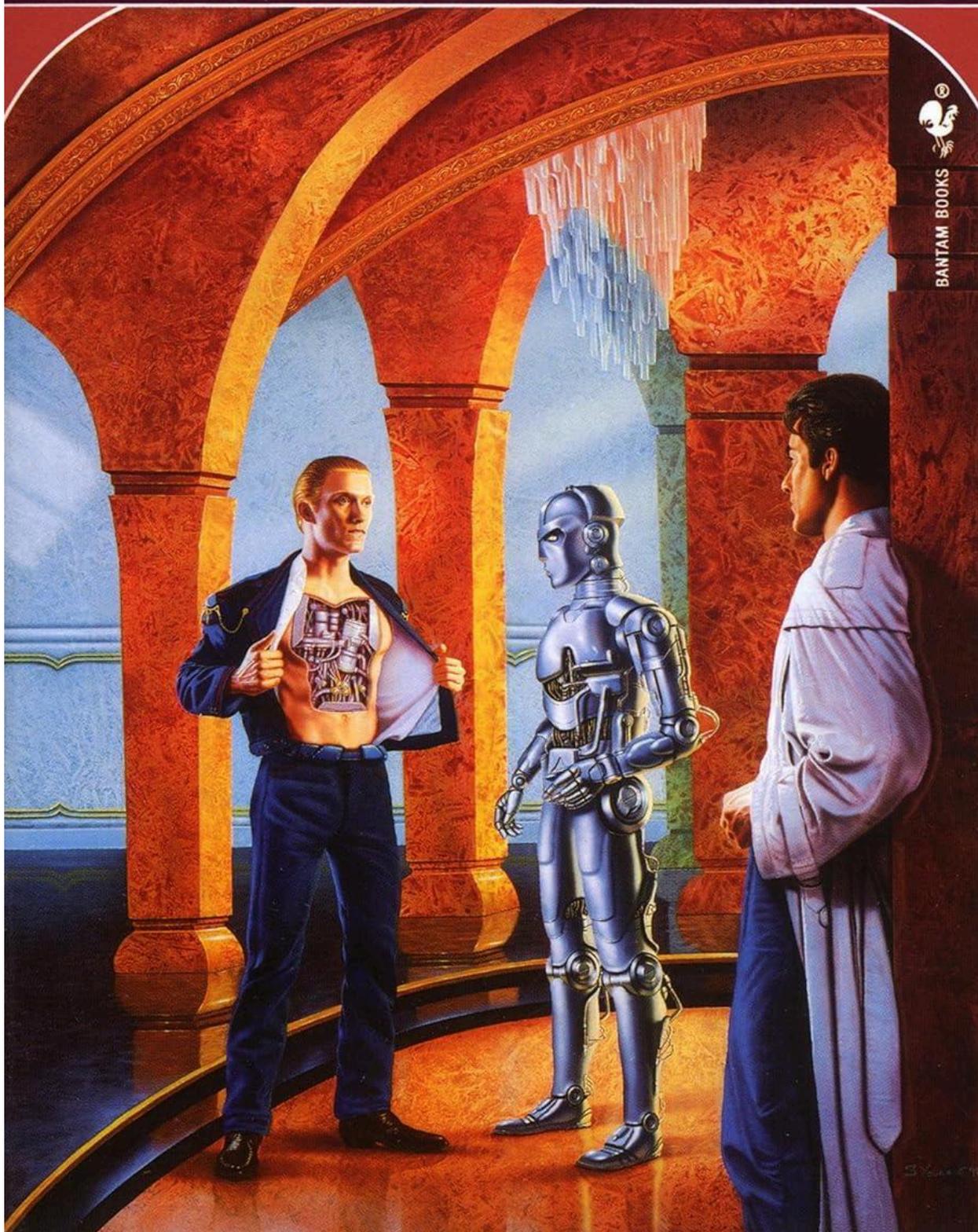
Lijeは、どうしても邪魔をするならば、あなたを武器で殺すことができると言う。Daneelは、その可能性を考えて、あなたが寝ている間に、武器からエネルギーを抜いておいた。Lijeはそれを確認し、あなたがロボットである証拠を見せろと命令。Daneelは胸を開いて金属を見せる。Lijeは家のロボットを3人呼び、Daneel

がロボットであることを見せるが、決して誰にもそれを言うな、そして、ここに残り、もし、Daneelが私の行動を妨げるならば、3人でそれを阻止せよと命令、勿論、Daneelは3人のロボットに力ではかなわない。

# ASIMOV

THE ROBOT SERIES

## THE NAKED SUN



BANTAM BOOKS

そこに別のロボットがGruerの助手のメッセージを持ってくる。それは、Lijeが要求した、捜査に必要な人間に会える為の許可証であった。

Lijeは早速、Solariaで一番著名な社会学者を探し、面会の許可を取るようにロボットに命令。

そして、3Dで予約をとり、飛行機で向かう。オープンスペースにLijeは必死で耐えながら、何とか、その学者の家に到着し、直接面談を始める。

彼は10年前に妻を亡くし一人暮らし、まして、3Dでなく直接、人間、しかも地球人と会うことは彼にとって、パニックになりそうなほどの厳しい体験。勿論、手袋をはめ、鼻にはフィルターをはめている。それほど嫌ならば、何故、地球人の私と会うことをOKされたのですか、とLijeは問う。

学者は答えて言う。私はここ10年間、必死で社会学を研究し、驚くべき、しかし、絶対に正しい学説にたどり着いた。それで、地球と、地球人に興味を持っているからです。あなたがSolariaの社会を注意深く観察し、考察するならば、それが、地球の社会と風習を直接的にモデルにしていることが明確になるはずですよ。

#### ---10. A culture is traced

(Solariaの文化を探求 /それは古代スパルタと同じ)

Solariaの近くには別の惑星があって、そこが人口過密になり、その人たちがSolariaに常住化して、やがて独立。ロボット産業が栄え、他の惑星に輸出するようになる。そして、各個人の所有する領域は大きく、その中を自由に動き回っても隣人と会うこともなく、そして、3Dビジョンも発達し、人と直接会うということが、まれとなった。Lijeは自分が地球の大学で社会学を勉強したこととかを話し、どうしたら、Solariaの人々と直接インタビューがスムーズに出来るか聞こうとしたが、学者は、忍耐の限界になり、失礼すると言い残して、立ち去る。

ほどなくロボットが飲み物とつまみを持ってきて、主人はあなたと3D

でお話したいそうで、今、準備しておりますので、しばらくお待ちください、とのこと。

準備が整い二人は3Dで話を始める。学者はSolariaの社会は、地球の古代スパルタと同じで、一部の特権階級とそれを支える奴隷で成り立っている。しかし、違いは、奴隷がここではロボットで反乱の心配なく、古代アテネの特権階級のように、文化的活動ができる。スパルタでは、特権階級の人間が、反乱を防ぐために強力な軍人である必要があった。しかし、どの社会も同じだが、常に上層部と

下層部の間緊張関係は存在し、それが社会の不安定要素となっている。そして、Gladiaの夫Delmarreの話となり、二人はお互いを認め合う友人であったとのこと。Delmarreは胎児学者であり、通常は持ち回りでその役をやるのがSolariaの慣習であったが、彼はその重要性を鑑みて、長期間やり、且つ、助手も使って、将来、引き継がせようとしていた。しかし、彼に直接近づける人間は夫人のGladiaだけで、殺せる可能性がある人間は彼女だけ。

LijeはDelmarreは伝統主義者と聞いたが、そうでしょうか、と問う。

学者は、ここSolariaでは皆、伝統主義者だが、一部急進的な考えのグループもいる。彼らは他のOuter Worldsから侵略されることを恐れている。それは人口が他と比べて極端に少ないから。しかし、対抗できるような新しい武器はあり、すでにそれは稼働していて、誰もそれを止めることは出来ない。

それは何ですかとのLijeの問いに対する答えは、それはロボット(positronic robot)とのこと。

#### ---11. A farm is inspected

(ある農場を調査 / 胎児農場)

性能の良いロボットを製造できることがSolariの独立を確かに守っている。しかし、私の独自の社会学理論はそのことではない。それは、ロボットがどんどん増えるということだ。人間とロボットの数の比がある限界点に達し、超えると、人間は非生産的となり、自由と幸福だけを追求することになる。そして、人口も減少を始める。Aurolaはそうなりつつあるし、ここSolariaも、そして将来的には地球もそうなる。そして、それは、全人類の終わりを意味する。

Lijeは、学者にお礼を述べ、ここの3Dを使わせてもらい、別の人に会いたいのですが、と依頼。学者はOKし、ロボットが来る。

Delmarreの助手に3Dで会えるように手配し、軽食を持ってくるように命令。軽食を済ませ、しばらくして助手と3Dで面会。

助手は女性で、まずはびっくり。彼女はSpacerのイメージとは違い器量は並み。しかし、声は魅力的でびっくり。殺されたDelmarreの助手になって3年、今は胎児農場に居る。セキュリティー長官の許可証を見せて、そちらに行き、見学したいと依頼。彼女は自分に近づかないことを条件にOKする。

Lijeは飛行機で農場に行く。苦しくはあったが、前回の飛行よりは軽かった。

そして、助手に農場を案内してもらおう。まずは、ガラスの容器の中で育てられる

胎児。全ての受精卵は受精後一か月で人間の医者が母親より取り出し、ここに持ち込まれる。それは、一月当たり平均15から20。現在は152体がいる。Solariaではここが唯一の農場、平均寿命300歳、人口2万を維持するにはここだけで十分。

それから二人は子供のケアセンターに行く。そこではロボットを上手に使うのが難しい。子供にしつけを教えるのは、ロボット脳にとって困難な仕事。子供は嘘をついたりするし、叱るのは難しい作業。しかし、故Delmarreは、何とかコントロールしていた。

それから二人はもう少し育った子供たちのいる場所に向かう。

途中で、助手は、殺人事件の捜査で来ているそうだけど、意味がないのではないかと、殺したのはGladia以外にはあり得ないと言う。

Lijeは私は他の可能性を考えている、例えば、あなただ。

それに対する助手の反応はLijeをびっくりさせた。

## ---12. A target is missed

(目標にかわされる / 危機一髪)

彼女は、爆発的に笑い転げ、落ち着くまでかなりの時間がかかった。そして曰く、Delmarreは長い間、助手を探していて、やっと彼の要求する助手を見つけた、それが私。私の遺伝子は全Solariaで3番目に健全なもので、そのデータが、この指輪に入っている。そんな私が、殺人犯とは、全く地球人は、とんでもないことを考える。

そして、もう少し成長した子供たちのいる場所に二人は移動する。

何百もの揺りかごが連なっていて、一人一人にロボットが付きっきりで世話をしている。しかし、しつけをすることはロボットにとって難しい。人間を傷つけてはならないというロボット原則#1が邪魔をする。将来良くなるために、現在、多少傷つけることは必要ということを経験に教えるようとしているが、完全には成功していない。別のロボット学者と共同で研究している。

そして、揺りかごから出る頃になると、一人一人に個別の部屋があてがわれ、独立することを教える。

そして、5歳から8歳程度のグループは外で遊ぶことを始める。二人はそれを見に行く。

子供たちはロボットと一緒に何やらゲームをしていて、大はしゃぎだった。Lijeは彼らはここを卒業したら親の所に行くのかと助手に問う。助手は語る。それはマシ。以前の持ち主が亡くなり、空きとなった家に入る。亡くなる人と、ここを卒業する人で、人口のバランスが取れている。結婚は遺伝子診断で最適なカップル間で行われる。少しずつ知り合い、結局はうまく行く。

Lijeは少しは楽になるかも知れないと思い、近くにあった3本の木の間に入り、多少は落ち着く。その時、助手が、危ない、と叫ぶ。Lijeはパニック状態で地面に倒れる。そして何とか立ち上がり、木に刺さった矢を抜く。子供はアーチェリーの名手で、劣等民族と認識している地球人と判断して、打った。付き添いのロボットがそれを教えた。ロボットは子供を止めようとしたが間に合わなかったと言う。他の矢を調べ、木に刺さっていた矢だけが、先が脂っぽい、これには毒が塗ってあるとLijeは助手に言う。

### ---13. A roboticist is confronted

(ロボット学者と対決)

助手はただただ仰天するだけ。毒矢を少年がLijeに向けて撃った、あり得ない。誰かが矢に毒を塗った、あり得ない。私は関係ないと反論。Lijeは、それでは、同じような状況のGladiaも関係ないのかと言ひ、3Dビジョンを用意するように依頼。

Lijeは、自分が誰と面会したいか分かっているのに思わず知らず、Gladiaとロボットに言ってしまって、自分で驚く。ごつい感じの助手と会っていた反動、かも知れない。

Gladiaは直ぐに3Dビジョンで現われる。前回は失礼したお詫びをしようと、あなたを探したが、分からなかった。

Lijeは3Dでなく、直接お会いしたい、これからあなたの夫と一緒に仕事をしていたロボット学者と会ってから、と依頼。

Gladiaは、彼は私の良き友で、3Dと一緒に散歩をしたりしていた。しかし、夫が死ぬ数か月まえからはしていない、彼は仕事が忙しくなっているようだ。

それからLijeはロボットに指示して、ロボット学者と面会。彼は気難しい感じで、Lijeが、Gruerが殺人の捜査で呼んだ地球人と知ると、3Dを切ろうとする。Lijeは、Gladiaとの話で、彼が人と直接会うことを極度に恐れていると知っていて、切るならば、私は、あなたに直接会いに飛行機で行きますと脅し、話を進める。Gladiaの夫とは一緒に仕事をしていて、彼は新しいタイプのロボットに興味を

持っていた。それは子供に躰のできるロボット、現在の少々の苦しみを、将来の良き事のために我慢することを教えられるロボットか、とLijeが問う。話はそう簡単ではなく、それは、将来もできないだろう。我々がテストしていたのは、もっと実用的なタイプのものだ。

Lijeは、私に直接会って、ロボット工学をもっと詳しく教えて欲しいと頼むが、断られる。しかし、私が何を特にあなたから教えてもらいたいかを聞くと、気が変わるでしょう、とLije。

ロボットは人を傷つけてはならないという原則#1は、意図的に誤解釈されてきた。それは、ロボットが殺人を犯せるということを隠すためだ。

#### ---14. A motive is revealed

(動機が明らかになる)

ロボット学者は語る。

ロボットに不信を持たせるようなことは言うてはいけない、それは危険だ。フランケンシュタインの話で分かるように、地球ではロボットを恐れ、不信を抱いていた。ロボット3原則はその不信を取り除く為に作られたが、地球はロボット社会にはならなかった。しかし、移住した地球人はロボットを辛い仕事を肩代わりさせる為に使った。

Lijeは、3原則は事実を少々ゆがめて表現している、直接会って、そうでないと私を確信させられないならば、そのことを全銀河に広めると言い、学者に、直接会うことを承諾させる。

そして、小休止の後、3Dで再開。

Lijeは、一人のロボットに人間を傷つけることは原則1に反するので命令されてもできないが、二人の個別の行動を組み合わせれば出来る、と例をあげて説明し、学者もうなずくが、それはGruerの毒殺についてであり、そんなことをする人間はここSolariaにはいない。そして、それはDelmarreの殺人については当てはまらない、Gladiaしか近寄れず、彼女以外に殺人を犯せる人間はいないと学者は言う。Lijeは2つの殺人は関連している、GladiaがDelmarreを殺したとするならば、Gruerを殺したのも彼女ではないかと問うと、そうだろうと確信して学者も賛成。

彼女が夫を殺した動機について、学者は、二人はよく口論していたと彼女から聞いている、彼女は、彼を嫌っていたからでは、との意見。

---15. A portrait is colored

(肖像画に色を付ける)

Lijeは、ここSolariaの社会では個人のプライバシーは神聖で、他人が詮索することはタブーではないかと考えるが、それは何についての口論だったのかと問うと、Gladiolに聞いたらとの答え。

Lijeがご協力をありがとうございましたと言うと、学者は、即座に通信を切断して消える。

そしてLijeは飛行機に乗り、Gladiolに直接面会に行く。LijeはGladiolが、面会の途中で、社会学者のように耐えられなくなるかな、とか考えつつも、彼女の家の戸口に立つ。彼女は意外に大丈夫で、家の中に案内し、自分の絵を見せる。それは絵と言うより、光を組み合わせて何かを表現する光の芸術で、実体は無い。

(英語原文では説明がかなり詳しいが、翻訳ではカットされている)

それから二人は家の外に出て野原を散歩する。そして、Lijeはロボット学者と散歩した時のことを聞く。彼はいつも地味で、ロボット工学の話しかしない。そして、彼女は全然理解できない。Lijeはオープンスペースに必死に耐える。しかし、多少の慣れは出来つつある。

やがて二人は池のそばに来て、ベンチに並んで座る。周りに花が咲き乱れている。彼女は、地球からのだけでなく、ここ原生の花を引き抜いてLijeに渡す。それは、女性の付ける香水のような匂いがした。しかし、ここSolariaでは人と人が実際に近づくことはあまり無く、地球、そしてLijeの妻の話になるが、Lijeは話題を変えて問う。何故、ロボット学者は貴女にロボット工学を教えようとしたのですか。彼女は、彼は私をアシスタントにしたかったのだと思うと答える。しかし、彼女がロボット工学に興味全然ないとわかり、散歩はしなくなった。

Lijeは彼から貴女と夫は、口論をしていると聞いているが、それは何についてですかと問う。それは、結局、彼女は夫が仕事ばかりで、自分をかまってくれないことに怒っている、彼女が金切り声で怒っても、夫は冷静、ますます、怒りが増し、憎むような感情を持つようになる。夫が死んだ時もそんな調子で口論が激化して、気が付くと夫は死んでいて、私は叫び、ロボットが来て、そして、その後のことは記憶がない。皆が私が夫を殺したと思っている、Lije、助けて下さいと頼むGladiolにLijeは安心しなさいと言う。そして、太陽が地平線に沈みかけていて、真っ赤になっているのを見ているうちに、オープンスペースにいるのが限界に達し

て気を失う。

---16. A solution is offered

(解決を試みる)

Lijeは徐々に目覚め、彼が最初に認識したのはDaneelの顔だった。LijeはGladiaの家の部屋のベッドに寝かされていた。Gladiaも言っていたが、彼女はLijeに連絡を取ろうと、LijeとDaneelのいた家に連絡をとり、Daneelと話をした。そして、監視しているロボットをDaneelから離し、DaneelをLijeを探しに行かせた。そしてDaneelは胎児農場にも行き、ある程度の情報を得て、Gladiaの敷地に来て、気を失って池に落ちる寸前のLijeを救った。Lijeは泳げずにおぼれていただろう。Daneelは彼女がLijeを殺そうと、家から連れ出したと主張。彼女は地球人がオープンスペースに耐えられないことを知っていた。

Lijeは、彼女が夫を殺したならば、Gruerも殺したことになるが、それは違うと言う。Daneelは、あなたは地球人で、彼女の色香に惑わされている。彼女は夫とGruerを殺し、あなたも殺そうとした。

Lijeは反論して、凶器が発見されなければ、殺人は成立しないと言う。

しかし、Daneelは、それはこうです、と説明を始める。

Gruerが毒を盛られた時に呼んで、診察、治療をした医者は、実は、かなり歳をとってからGladiaの父親となった人。彼は、殺人現場にも呼ばれたわけだが、失神して倒れているGladiaの下に凶器があるのに気が付き、それを、誰にも分からないように隠し、破壊した。父親として娘をかばったのだ。

Lijeは、それはロジックではそうなるかも知れないが、あり得ない。医者は高齢で、殺人現場で動転して、そんなことは出来ない。

Lijeは疲れていて、Daneelの手を借り、やっと安楽椅子から立ち上がり、そして歩きながら考える。そして、窓からもうすでに暗くなった外を眺める。それは、初めて、素直に眺められたオープンスペースだった。それまでは、捜査のために必死に耐えながらであったが、単に、そこに空間が広がっていると感じた。それはLijeの意識には革命的なことで、同時に彼は、全てのことが一つにつながるように思えた。凶器がどうなったか、誰が殺人を犯したのかが分かった。

---17. A meeting is held

(会合をもつ)

Daneelの勧めに従い、Lijeはベッドで休む。しかし、明日の罪状認否の会合を考え、なかなか眠れない。しかし、うまく行けば、24時間以内に地球に向かえる、しかも、地球にとって必要な、そして、唯一の解決策を携えて、とか考えつつ、いつしか眠る。

翌朝Lijeはすっきり目覚め、身支度をして、会合を始める。

まずは、Gladiaが現れ、そして次々とSolariaの関係者が現れる。セキュリティー長官の暫定代理、ロボット学者、社会学者、胎児農場の助手、そして最後にGladiaの父親の医師。

Lijeは、私が、この殺人事件の解明を依頼された刑事で、これから以下の3つの項目順に話を進める、それは、①動機、②機会、③凶器。

まず①動機について。Dr, Delmarreは、他の銀河を征服しようというある陰謀に気付いていた。その関係者は、殺人の動機を持ち、ここに居る全員は、その関係者ではないと完全には否定できない。

次に②機会について。Dr.Delmarreは夫人以外の人間が自分に近づいてくるとは夢にも思わないし、それは、ロボットを使って排除できる。だから、誰かが近づいて来たら、それは3Dビジョンと思う。ところがもし、実際の人間だとしたら、こん棒で頭をつぶせる。だから夫人だけでなく、ここに居る全員が実行する機会がある。

最後に③凶器について。夫人がしたケースと、他の誰かがしたケースに分けて考える。まず、夫人の父親である医師は現場にいて夫人の容体を診たわけだから、凶器を始末できる可能性がある。医師は誓って私はしていないと言い、他の全員はそれに反論なし。

次に他の誰かがしたケースについて。

Gruerのケースも、私が毒矢で狙われたケースも、ロボットを組み合わせで使えば、ロボットが人間を殺せることが分かっている。Dr.Delmarreは、体の部分、例えば腕を切り離せるようなロボットを研究していた。誰かが、その腕を切り離すように命令すれば、その切り離された腕を使って頭を叩き割れる。しかし、そのように、人間を傷つけないようにプログラムされているロボットを、殺人目的に使うには、ロボット工学の高度な知識が必要。それを持っているのは、ロボット学者だけだ。そして、彼には二つの動機がある。一つは、彼はSolarianではあるが、人間であり、Gladiaを欲しいと思うことは考えられる。彼は彼女を助手にしようとしたが断られた。その恨みと彼女を夫として所有しているDr.Delmarreに対する妬み。彼女に罪を着せ、夫を殺せば一石二鳥だ。しかし、ロボット学者Leebigはとんでもないと反論する。Lijeは今言った動機は潜在意識のもので、本当の動機

は別にある。それは、彼が実行しようとしている計画に、Dr.Delmarreが邪魔だからだ。その計画とは銀河を征服することだ。

---18. A question is answered

(疑問解決)

Solariaの他の世界に対する秘密兵器はロボットだ、そして、その頭脳を搭載した宇宙船だ。その宇宙船は一隻で、通常の宇宙船の大艦隊を撃破できる。

LijeはDaneelが現在、Leebigの家に向かっていると言うと、Leebigは他の人間に会うことを極端に恐れているので、告白する。Dr.Delmarreのそばに居たロボットの腕は取り外せる、私がGruerを殺そうとした、毒矢でLijeを殺そうとしたのも私、だから、Daneelを来させるな。

そう言っている時に、家の入口で音がして、入ってくるのを察知し、来るな、と言いつつ、毒をあおって自殺する。

3DにはDaneelが映り、こちらを向いて、皆に、人間が死んでいると言う。

+++++

これにて事件は解決、Daneelの手配でGladiaはAuroraに移住する。

Dr.Delmarreを殺したのはLeebigということで事件は解決したが、実際は、その記憶を失っているが、Gladiaがやった。このままSolariaに居ると、真実が表面に出る可能性があるし、Gladiaの希望もあり、Aurolalに行くことになった。

+++++

そしてLijeは地球に戻り、ワシントンで、司法省の事務次官のAlbert Minnimと再会。彼がそもそも、説明をして、LijeをSolariaに派遣した。

彼にLijeは報告をするわけだが、すでに、Solariaの強みはロボット、少ない人口、長い寿命とする報告書は送ってあり、それに対しMinnimは彼らの弱点は何かと質問。それに対しLijeはその3点が彼らの弱点ですと以下、自分の見解も織り込みつつ説明。

彼らは人類が100万年間維持してきたものを破棄しています。人間同士の交流が無い、いわば、孤立した個人が集合している惑星です。彼らは停滞し、いずれ、駄目になる運命です。そして、逆の方向で、同じような運命を持つ惑星が地球です。我々は、地下の都市に自分自身を閉じ込めている。このままでは、衰退し、駄目になる運命です。我々は宇宙に出て行かねばならない。地下都市は

子宮のようなもの。いずれ出て行かねばならず、一旦出たら戻れない。それが我々の運命です。

Minnimは、よし、分かった、ご苦労だったと言って、話を終わりにする。

Lijeは1年以内に私はAuroraに向かうだろう、そして、一世代後には、人類は、もう一度宇宙に出て行くだろうと考えつつ、妻と子供の待っている家に向かう。

===== F I N =====